

# まちの情景と建築

田中 修一

日本編

住宅1 自然風景との調和 長野県白馬村 別荘の佇まい



イングランドのチューダー朝と比較するとやや貧弱にはなるが、ハーフティンバーとスタッコ壁は別荘のデザインとしてはよく見かける手法である。幸いにこの一帯は電柱が見当たらないのはうれしいことで、別荘地はこうあってほしいものだが、ゲレンデのホテル街に出ると無造作な電柱が現れてしまうのは残念だ。

長野駅から西へ、戸隠→鬼無里を経て富山との県境に白馬村はある。冬は雪が深いので屋根の傾斜もきつい。スキーのメッカだが、夏のイベントをJRと提携し、高山植物とゲレンデを利用したユリ畑の観光で売り始めることにした。別荘やコテージの多くは、ゲレンデ周辺や自然豊かな森に囲まれたエリアに集中しており、新鮮な空気にあふれてすがすがしい。



八方尾根に向かって登山道をゆくと、高山植物の草原の上を雲がかすめて行き過ぎる情景に出会う。雪渓を横に見て夏でも肌寒い気温に出会うと、北アルプスの標高の高さを知る。ニッコウキスゲ、チングルマなど、素人でも知っている高山植物が山肌一面に咲き誇る。その一方で、ゲレンデでは夏スキーも行っているが、リフトの周辺は一面のユリ畑で覆い尽くされている。その畑の中を延々と歩くことができる。それは見事だ。